



一人ひとりを大切にするために

学級経営のエキスパート教員である山田教諭に、日々の実践の中で大切にしていることについてお聞きしました。その一部を御紹介します。



心をフラット（穏やか）にすること

子どもたちの心の穏やかさをどう保ち、どう切り替えられるのかという視点を大切にしています。

心が穏やかでないと、相手の言うことを聞こう、がんばろうという気持ちになりにくいものです。逸脱した行動をとっている場合は、その子が『**穏やかに自分で戻るにはどうしたらよいのか**』を考え、その状況をいかに**つくるのか**を考えます。注意して何かさせようとしているときは、先生も子どもも、お互いに無理をしている状況ではないでしょうか。うまくいかない時には、次はこの作戦でやってみようと、**自分（先生側）のやり方を変えてみます**。相手を変えようとするのではなく、自分のやり方を変えることで、逸脱した行動から戻る道づくりをします。

他のクラスがきちんとしているのに、どうして自分のクラスは・・・と焦ることもあるかもしれません。そんな時の焦りは、感情的な言葉になりがちです。「きちんとやらせよう」から「**心が整ったら自分からやるんじゃないか**」と発想を転換し、子どもの心が整った状態「**学びのベストコンディション**」を作り出す声のかけ方や学習のしかけを工夫するようにしています。

「誘う」

～しません（否定）、～してください（お願い）



～してみましょう（誘い、働きかけ）

行事のときには・・・

子どもたちの中には、行事が苦手な子やしんどさを感じながらも言い出せない子もいます。

例えば、体育祭のような順位や結果が出る行事の場合、**勝ち負けではないところに楽しさを見出せるような声かけ**を心がけます。行事後のクラスの姿として、「助け合う」「支え合う」「がんばりをたたえ合い、認め合う」などを、**取り組みのスタート時点で伝えたり、可視化したりする**ようにします。勝っても負けても、得るものはあるはずですが、視野が狭くなってしまう子は、勝ちにこだわるとだんだんと苦しくなってくることもあります。

子どもたちで作戦を立てるような場面では、運動が得意な子たち中心で話が進んでいくような様子も見られるかもしれません。そんなときは、**苦手な子に先生はどう声をかけるのか。一人ひとりの子どもに対してその子の何が苦手かを分かった上で先生がプランをもって指導にあたるように心がけます。**



はなれていても、がんばっているよ

教育課程上同じ学習内容をしている場合は、本人の了解を得た上で、**支援学級での学びの様子を交流学級で紹介**することもあります。

例えば、支援学級の方で先行して授業を進めている場合、レポートを「こんな感じで作ってみよう」と交流学級で**例として紹介**したり、提出箱に提出したレポートを単元末のまとめの前**にお互いに見ることができるよう**にしたりします。振り返りにお互いのことを書く子どももいて、それがきっかけで給食時間に話をする姿も見られました。授業の中で、**離れていてもがんばっていると感じることが**できます。

教室に入れず、別室で学習している子がいて、リモートで授業に参加している場合、あえてライブ感を大切にし、「ちょっとプリントを渡しに行ってくるね」と届ける姿を子どもたちに見せることもあります。**先生がどんな姿を子どもたちに見せているのか、子どもたちは先生の姿を見ています。**

子どもたちが自然と「**つながっている**」ということが感じられるようでありたいと思います。



子どもの姿をどう捉えるか

子どもたちは、先生の姿をよく見ています。そして、知らず知らずのうちに真似ていきます。

例えば、先生がある子をしかってばかりいれば、周りの子どもたちもその子を「また〇〇している」「しかられている」「いけないことばかりしている」となっていくます。**先生はその子の何を見ているのか、声のかけ方で変わってきます**。イライラして廊下にいるのならば「今、葛藤しているんだね」、教室に戻ってきたときに「自分でクールダウンして戻れたね」「前より時間が短くなったね」など、良い面をさりげなくつぶやくようにしています。

大人として、**子どもが表出する言葉だけに過剰反応せず、支援の目線で子どもを見て関わること。その子の不安をどうやって先生が取り除いていくのか、**周りの子は見ています。そして、見ている子の中から、関わり方を工夫してくれる子も出てきます。

支援の目線

(例)「だるい」等と言って学習に取り組みにくい子
困っているが、それをうまく表現できずに自己防衛的に言っているのかもしれない



不安を取り除く 見通しがもてるようにする 等